

論文の内容の要旨

氏名：勝原基貴

博士の専攻分野の名称：博士（工学）

論文題名：大正・昭和戦前期における岸田日出刀の近代建築理念に関する研究

本論文は、大正末から戦後再建にかけて活躍した建築学者・建築家である岸田日出刀（1899～1966）の講義ノートと草稿・原稿類に着目し、大正・昭和戦前期における岸田の近代建築理念の性格及び特徴を探ることを目的としている。

本研究における大正・昭和戦前期とは、岸田が東京帝国大学に入学した1920年から1930年代までの期間を指している。この時期の日本建築界は、1920年に日本の近代建築運動の先駆をきった分離派建築会が結成されるなど、歴史主義からモダニズムへと大きく推移していく段階にあたる。明治以降、西洋由来の建築学が導入されてきた我が国の建築界では、とくに様式主義的な設計手法が一定程度学習され、建築家個人あるいは日本建築界全体による創造が問われ始めた段階であった。岸田もまたその渦中で建築活動を展開した人物の一人であるが、これまでの包括的な日本近代建築史では、帝都復興創案展におけるラトー建築会の活動に言及される程度で、建築家としても、東京大学安田講堂の設計以外が取り上げられることは殆どなく、寡作であるとみなされてきた。その他、岸田に言及のある研究書においても建築史上において注目される建物の設計者としてではなく、むしろ戦後に活躍した後進の丹下や前川との関係で語られ、とりわけ弟子の丹下を世界的な建築家に押し立てた「丹下健三の立役者」と位置づけられてきた。そのため従来の研究では、多面的かつ多様な活動を支えた岸田の中核を為す、彼の建築観なり建築理念といったものについては重要視されず、伊東忠太ら先代と丹下らとの間の世代にいた岸田自身の内実が詳しく検討されてこなかったことにより、それぞれの世代間にいた岸田の果たした役割が明らかでなかった。

これまで、岸田に関する実証的な研究を困難にしていた要因のひとつに、一次資料の大半が所在不明であるという問題があった。そこで、没後全国各所に散逸してしまった岸田関連資料の調査を行い、各種刊行物の蒐集にも努めた。特に、金沢工業大学建築アーカイブズ研究所蔵の岸田日出刀資料は大きな役割を果たした。未整理の状態のままであった資料の整理作業を行い、検索可能なデータベースを構築することで研究上の用途に資するものとするとともに、多くの新事実が明らかとなった。本研究では、岸田直筆の原稿やスケッチ、日誌、図面、写真など手つかずの第一次資料を豊富に用いた。

本論文は、序章、本論6章、結論で構成される。

序論では、研究の目的、既往研究の成果と課題、一次資料について、岸田の生い立ちと経歴、研究の方法と本論文の構成について述べた。

本章第1章「岸田日出刀の自己形成：大学入学から営繕課勤務時の海外渡航まで」では、岸田が大学教授として本格的な歩みを始めるまでの様々な体験が岸田に与えた影響について考察した。

その結果、学生時代から分離派建築会の面々との接触があり、営繕課では大学関連施設の設計にとどまらず、従来考えられていた以上に幅広い種類の作品を残していたことが明らかとなった。「呉市公会堂及図書館」などの当該期の岸田の設計活動（16作品）を初めて提示した。折衷主義的な作品や複雑な面の組合せで立体操作を行った作品の設計を通じて、新たなる建築表現の領域開拓を目指し、様々な習作を重ねていた。岸田は、分離派建築会の展覧会に足を運んでいたが、ドイツの建築雑誌に掲載されている作品の模倣とも感じられる姿勢や高次曲線を多用するなど表現主義の個人主義的な側面に没入していた彼らの作品群に違和感を感じ取っていた。そして、大正末の世界一周の洋行で訪問したダルムシュタットでは表現主義の作品に失望し、欧州では、無装飾で直截な幾何学的なデザインに移行していることを認識する。

第2章「洋行後にみられる建築理念の変容 - 新たなる理論形成に向けて」では、岸田が、洋行からの帰朝後に執筆した評伝本『オットー・ワグナー』と講演会「建築家オットー・ワグナー十年祭」、博士論文の分析を通して、洋行後にみられる建築理念の変容について考察した。

帰朝後の岸田は、急逝した長谷川輝雄の後継として日本建築史の学習を始める。彼の遺志を継ぐようにW. ヴォリンガーが継承した「芸術意欲」を参照し、各時代特有の時代精神の把握を大切にするようになる。このような理解の深まりをもって、軽視されていたルネサンス期以降の建築を取り上げた博士論文『欧州近代建築史論』を執筆し、それまでの様式史にみられた地誌学的な歴史叙述や考古学・文献等による実証的な追求とは異なる時代精神の変化を意識した建築史を提示するとともに、ワグナーの評伝本と講演会を通して、建物の外観に古典的な雰囲気が残っていることから重視されていなかった彼の再評価を行った。

第3章「講義原稿『意匠及装飾（形体篇）』にみる岸田日出刀の建築造形理念」では、「意匠及装飾」の講義原稿（1937年）を元に、岸田が展開した建築教育の内容を提示し、同時期に設計された墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に関する講演に敷衍して分析し、岸田の建築造形理念を考察した。

講義では、「因襲（Convention）とはちがう」「日本の伝統（Tradition）を充分考えなければならぬ」という伝統を意識した見解を示し、没個性化をもたらすと捉えていたインターナショナルの傾向を危惧し、普遍性だけでなく「ローカリティ」という個性を説明していたほか、モダニズムの解説では、ル・コルビュジエの主張を援用しながら、初等幾何学の純粋にして識別しやすい形体、「平面」と「建築的秩序」の重要性を主張していた。そして、岸田は、幾何学的秩序を元につくられる建築形体の新たな造形面での美意識を「形式感」と呼んだ。さらに、同時期の設計活動を通じて、自らの造形理念の具現化を試み、多くの建築家たちが参加した忠霊塔の設計競技の場においても講義と同様の主張を展開していた。

第4章「講義原稿『建築計画』にみる岸田担当科目の講義方針とその理論的特質」では、「建築計画」の講義原稿（1937年）から彼の講義方針を読み取り、前任者・塚本靖の講義項目との比較から岸田の建築教育の理論的特質を考察した。

「建築は人間生活の容器」という定義を持ち出し、人間生活を解明すれば、建築の理解につながるという岸田は考えていた。その考究すべき人間生活には、「物質的・精神的の二つの方面がある」として、「人間生活の物質的方面を考えるもの」が「建築計画」、「建築の求める人間の精神的満足」を考えるものが「意匠及装飾」であると位置づけ、「計画」を「Planning」ではなく「Design」の和訳として捉え、「建築を計画（Design）する」ための学問として自身の担当科目に関連性を持たせていた。そして、「建築計画」は、人間生活の理解に欠かせない分析として住宅史が続く。また、岸田は「建築非芸術論」への反駁を意識し、ワグナーの言説を援用しながら建築の芸術的側面を留保した。塚本から形式的に引き継いだ講義項目を改編させながら、当時のカリキュラムには存在しなかった新たな建築教育を展開していた。

第5章「『建築の日本趣味』に対する岸田日出刀の見解」では、これまで明らかでなかった未刊行史料『日本的趣味意匠の研究（草稿）』を中心に、岸田の「建築の日本趣味」に関連する言説を分析することで、「建築の日本趣味」に対して、岸田がどのような見解を示していたのか検討した。

「日本的趣味意匠の研究」では、明治末から大正期に盛んに行われた様式論争の延長上に自らの考えを示した。これまでの様式論争の限界点として、日本にふさわしい構造材料に対する見通しがなかった点を指摘し、瓦屋根の形体や斗拱などがなぜそのように形づけられてきたのか、その歴史的必然性を理解すべきであると主張した。そして、今後取るべき方法として、「①現代建築の発展、②日本建築の再検討、③日本の風土的特異性と建築の関係」という3つの検討事項を掲げ、これらに対する理解を深めていくことで、日本独自の近代建築を追求することを強く主張していた。さらに、ナチスの建築統制に対する批判文を發表し、統制によって建築家の個性が低く評価されていること、歴史的様式を設計に応用する手法があまりにも陳腐なものであると失望の念を示した。このような状況を岸田は、「新化再現が為されていない」と表現した。

第6章「大正・昭和戦前期における岸田日出刀の近代建築理念の性格及び特徴」では、前5章の知見を踏まえ、大正・昭和戦前期における岸田の近代建築理念の性格及び特徴について考察した。

ワグナーの評伝本によって深まっていったより普遍的な近代建築に対する理解、その後の建築教育での展開、そして、日本の建築的独自性をどう表すか、これらが重なりあったところに、戦前期の岸田の近代建築理念の特徴があった。それらを集約すると、日本の風土的特異性の反映として現れる「構造と材料の根本方針と建築の形体との関係」ならびに「時代精神という建築新化の外的要因」の

把握を大切にするスタンスがみられる。これらを統合した「建築の意義、目的、要求に合致した歴史的伝統の『新化再現』」を目指すものが岸田の近代建築理念であった。そして、このような理念が、彼の「建築意匠学」確立を目指した建築教育に表れていることなどを明らかにした。

そして結論では、総体としてどのようなことが明らかになったのかについてまとめた。彼の理念形成の端緒には、分離派建築会の存在があり、岸田にとっての様式主義からの脱却というひとつの試みであった。歴史というものを歴史主義とともに拒絶するのではなく創作論に直結させようとする伊東の意志を別の形で継承しつつ、それを新しいモダニズムの理論に直結させようとした努力が岸田のテーマとしてあった。その後の前川や丹下の思想的下地となり得る近代建築理念を戦前期の岸田が具備していたことを明らかにした。